

大和第九

九四

大正九年七月七日 杉山梅

第一課

野村海軍省副官殿

藤大和艦長

帆船リマン蹄一件

今朝小樽北海屋ホテル滞在米人

D. J. H. Smith

ヨリ別紙、書面ニ接シ候ニ付今人ハハ書面ハ海軍省

ニ取次クヘキ旨傳ヘ今時ニ出港スヘキ新高ヘハ本件

通シ置キ候

今船ハ百二十噸ニ掃蕩働機附白塗「スクーナー」ナル

越ニ候

一

一

洋 算

本件ニ関シテ通信宛先ハ札幌北海屋ホテル方々人
宛ニ差支ナキ由ニ候
右御届ス

(別紙一枚添)

終

1743

Otaru, Japan
July 6th 1920

From: D. A. Holmes, American Citizen.
To: The Commanding Officer on board His Imperial Majesty's Ship "Yamato"
Subject: Information regarding the Schooner "Liman"

Request that you give such information as you can regarding the Russian Schooner Liman.

The Shhooner and Cargo belong to D. A. Holmes American Subject It was dispatched from Hakodate on May 23rd for Okhotsk Siberia, carrying a cargo of supplies to the mines of my Company.

There is an American Subject on board named A. A. Medlenka. He is in charge of the cargo.

If you can, please give me the following information; did this schooner arrive in Okhotsk? if so are the Captain and Mr. Medlenka safe or have they been killed by the Bolshoviki? Is the schooner now in Okhotsk? if not when did it leave there?

I have had news that the wireless station at Okhotsk had been broken up as also that there was a Japanese Ship there. This makes it necessary for me to call on you for this information.

In case of doubt as to my sincerety I can refer you to the following who can vouch for my character and to the good will of my Co. (the Far Eastern Development Co.) Mr. H. Hunter of Osaka, Baron Miigata of Tokyo, and Mr. Mori a member of the Diet at Tokyo.

Respectfully,

D. A. Holmes
D. A. Holmes.

1744

叔

大正九年七月十九日

米田尚平武蔵宛

有副友

海軍

リッレ早、消息と聞ふ件

大正九年七月十九日發

近日マダニ君来有御話アリッレ早、消息と聞ふ件

子達才三船隊及在開場、肥前、電報局台に所才三船隊

マ、一、電報とマ、只今迄、所何事知に所、早、消息と聞ふ件

此、才三船隊、才三船隊、才三船隊、才三船隊、才三船隊

本、才三船隊、才三船隊、才三船隊、才三船隊、才三船隊

才三船隊、才三船隊、才三船隊、才三船隊、才三船隊

才三船隊、才三船隊、才三船隊、才三船隊、才三船隊

松御直知

官房第三文の凡號

杉田周樹

7.19 1745

海軍

大正九年七月廿七日

海軍陸隊參謀長

名別官房

西條

山房一〇七番番長ノ西條既知品字近所分守

知悉(オコソク) 行中ノ千回十二消息

ニ接シ 報告方 電照シ 大ナリ

1746

1746

手紙
二、九七
...

海軍
1747
1748

七月三日
...

東京商船株式会社
専務取締役 堀江正三郎
東京市京橋區彌左衛門町四番地
電話 京橋 二八九七番

海軍軍令部參謀
海軍中佐 鈴木辰雄
野村副官殿

見込
...

敬具
 送還方願出
 万電報有之
 破致懷乗組
 帆船東海丸
 漁區弟百十
 漁區弟百十
 印合水

産組合

1749
9.7.1750

號第一、二三號

大正九年七月五日

露領水産組合組長 小島源三

海軍大臣 加藤友三郎 殿



遭難船員救助方請願ノ件

拜啓陳者當組台員保阪慶藏ノ租借經營ニカ、ル堪察加西海岸漁區第百十
 四號ゲ、レスノフスキ、第(四)レスナヤ河口南二路里半)及漁區第百十
 四號デ、レスノフスキ、第(五)河口南四路里半)ハ派遣致候帆船東海丸
 (九五噸)儀六月十六日北緯五十九度四十分ノ地點ニ於テ難破致候乗組
 員一同無事ナルモ糧食三十日分ノ外準備無之候ニ付キ右救援方電報有之
 候間該方面巡航中ノ驅逐艦ニ對シ若シ遭難者ヨリ附近漁場へ送還方願出
 候節ハ願意聽許相成ル様御電訓方特ニ御詮議相仰度此段請願仕候也

敬具

露領水産組合

1749
9. 7. 8 1750

百六十五
 下
 〇

命救助御願
 弊社所有木造汽船東海丸（大正六年
 拾貳月連水總比敷五貳是比乘組員
 船長端谷健太郎外貳拾名目下並
 船内川高會之傭船中 去儿六月貳日
 孟級裝甚密加串島西岸回取北端
 澳場之向之航行中 北緯五十九度
 四十八分 車徑百六十一度 拾分 地負三於
 子遭難之船体救助員 込ナキ古ニ大破之
 救助方電請有之候之就キ特別ノ御鑑
 議ヲ以テ是等式拾四名ノ救助方何卒
 至急御取平 被成下度此段特ニ

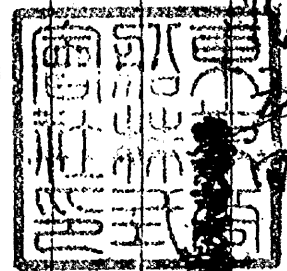
長官有谷朱代會出

懇願候也

大正九年七月

海軍大臣

加藤友三郎殿



東京商船株式会社

取締役社長 辰澤延次郎



東京商船株式会社

1752

叔

海軍
海軍省
海軍省
海軍省

大正七年七月三十一日

馬場要港部司令官

大屋五

軍務局

此の如く
三三 批進 署のユ流ニ
一 兩 傍 吏 あり 在日 秋 沼 湖 あり
三三 批進 署のユ流ニ 救 助 する 日
三三 批進 署のユ流ニ 救 助 する 日

船主 浦 栄 協 会 船 務 株式会社

給 収 額 三一九二

軍務局受
1753 9. 7. 23

救

電報 七月六日

副官宛

國際汽船



首電拝見御影三無事基隆、
向ヒタニカ感謝、堪、不取敢、ス御禮
申上ニ

軍務局

洋



(送)



(杉田屋持)

1754

軍務局



		<p>国際後航宛</p> <p>者宛宛</p>	<p>軍船特津洲</p> <p>七川二十五日 午時五分</p>	<p>聖徳飛綾波春山丸取船ノ及去毒セシム 今船ニ枚ノ</p>	<p>推進力航行ナシ得ニリ 確カメタニ付</p>	<p>引込シタニ由馬公要港 ヨリ電カアリ</p>		
--	--	-------------------------	-------------------------------------	------------------------------------	------------------------------	------------------------------	--	--

海軍
海軍省第十三号

(原心)

電 報 着 信 紙

局 着		局 發			名氏所居人信受	
取扱者	受信 付午後 後 八時 分	七 七 九	付午後 後 七時 五分	七月 四日	第三 二號	<p>伊藤 誠</p>
		字	分	日	號	

指 定		名氏所居人信受	
事 記		紙 數 第 八 號	<p>八馬公要港部令</p>
着信日附印			

推読

林泰丸故助一為機波ヲ派遣ニ
同船期後ニ枝ノ推進ヲ要ニ力航行可
ナクテ只モ付收船セシム

海軍大臣宛
海軍省
海軍省
海軍省

大正九年七月二十四日
留年
海軍省
海軍省

國際汽船

海軍大臣宛

譯文

蘇社汽船 蘇社山丸 二十一日 臺灣 濟南 廣東
沖田 渡地 東三 推進 極 後 航行 自由 失
ヒ 其 後 消息 不明 ト 臺北 通信 局長 ヨリ 通信
アリ タリ 至 急 沙 救 助 願 ヒ タシ

終

（心）

水産局

郵務局

國際汽船株式會社

神戶市海岸通八番地

No.

大正九年七月廿七日

海軍大臣

加藤友三郎 殿

國際汽船株式會社

謹啓仕候陳者弊社船泰山丸臺灣「ガランピ」沖遭難ニ關シテハ直チニ軍艦秋津洲ヲ御派遣相成全船ノ難船ヲ護衛被下尙逸速ク其消息ヲ拜承スルヲ得タルハ貴官ノ御高配ニ依ル事ト深謝仕候御蔭様大事ニ至ラス膨湖島馬公ニ避難致シ居ル旨ノ入電ニ接シ申候御安心被下度候

尙馬公碇泊中ハ種々馬公要港部司令官殿ノ御配慮ニ待事多々有之可ク候間宜敷御願申上候
右御禮迄如斯ニ御座候
敬具

9.7.21

1758

海 八三〇 軍

機中第十一三行紙

大正九年八月三日

發布濟

軍務局

第一課

初員

大正九年七月三日

右副官

第三艦隊副官

東海丸救難之開入件

右件之開入之細則之通り東海丸船株式会社に

謝意申付候之付

右通

御務

謹啓 弊社所有船東海丸勘察加ニ於テ
 遭難付人命救助方特ニ御願申上置
 候 刻貴艦千早去ハ十八日本船乗組員貳
 拾四名澳夫四拾六名ヲ本艦ニ收容相成
 更ニ夕方スルニ上陸セシメ内地便ヨ待夕
 シムベキ事ニ御取計被成下候 茲御指示
 相蒙リ茲ニ始メニ安堵仕候事、御座候
 不取敢貴省、御懇情奉深謝候 退
 閑係御管下ハ宜敷御傳、被下度奉
 願上候
 右得貴意候 勿レ謹言

長官商俗朱式會社

1760 7.27

東京商船株式會社

東京商船株式會社

大正九年七月廿六日

社長 辰澤延次郎



海軍大臣 加藤友三郎 殿

1761

軍務局

七七九

大正九年七月二十九日午前八時一分 宗谷岬 局發
大正八年八月八日午後五時十分 海軍省 局着

受信者 海軍次官宛
發信者 第三艦隊司令長官

電報譯

第三艦隊二二六號

二十一日千早夕ウスク 着遭難船東海丸船長及
船員一ヲ不日立川ノ日光丸ニテ函館ニ送ルコト
其ノ他ノ船員漁夫ハ五十日分ノ糧食ヲ與ヘテ各漁
場ニ委託内地便ヲ待タシメシ處ニ去日オコソクニ
テ三益商會ヨリノ救助船盛運丸ニ會シ狀況ヲ
告ケテ收容ニ赴カシム
二 給炭船カイホウ三菱機関用視察船オウロラ

海軍

及伏木、北斗、南部、諸船カコック、在泊附近漁場

漁撈ニ從事中

三、二十五日ウライソ、ニ、漁業中、伏木丸ニ會シ其

請求ニ應シ冬謀ヲシテ附近平穩ナル旨漁夫

一般ニ通告セシメタリ

海軍

車務局



第一果

局長



大正九年八月廿日

省副官

東京商船株式會社社長宛

東海丸ニ関スル件

右件ニ関シ去ル二十九日當有宛示ニ船隊ヲ通報有之

左記ノ通り

候

右通

記

別紙ノ如ク輸入ノコト

軍務局

加七九

大正九年七月二十九日午前八時一分 宗谷岬 局發
大正八年八月八日午後五時十分 海軍省 局着

發信者 第三艦隊司令長官

受信者 海軍次官宛



電報譯



第三艦隊第二六號

一、二十一日早夕ウスクレ着遭難船東海丸船長及
 船員一ヲ不目立川ノ日光丸ニテ函館ニ送ルコトト
 其ノ他ノ船員漁夫ハ五十日分ノ糧食ヲ與ヘテ各漁
 場ニ依託内地便ヲ待タシメシ處ニ由日オコソクニ
 三益商會ヨリノ救助船盛運丸ニ會シ状況ヲ
 告ケテ收容ニ赴カシム

二、給炭船カイホウ三菱機関用視察船ヲウロラ

海軍

1764-2

及伏木、北斗、南部、諸船がコックに在泊附近漁場	漁撈ニ後事中	三、二十五日ウライクニ漁業中ノ伏木丸ニ會スル	請成ニ應シ冬謀ヲ附近平穩ナル旨漁夫	一般ニ通告セシメタリ
-------------------------	--------	------------------------	-------------------	------------

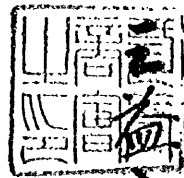
海軍

(同上)

1765

大正九年八月廿七日

函館区仲濱町十六番地



三益商會

保坂慶藏

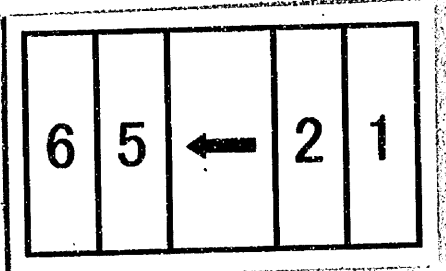
1766

海軍省

大臣副官殿



分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

謹呈

時下三伏之候

御座矣

閣下は為國衆

忠誠乃後奉欽

賀矣

却說當商會漢

業都負汽船東

海丸に東航目的地

ある漢場へ針路を

東航に東航の旨

1767
1768
1769
1770
1771
1772

海丸に乘船目的地

ある漢場へ針路を

採り航海中露領

西勘察加シヤマンカ

河口に於て遭難の

運命に陥り矣處

早速軍艦自軍號

を御派遣遣以て救

助被成下矣のみふら

帰玉乗船の御配慮

の光榮に浴したる結果

七名は諸始末の爲

帰玉乗取の御配慮
の光榮に浴したる結果
七名は諸始末の爲
現場に止り二十五名は
他の便取を相求め方
ツラ市を經由致し
帰途の豫定に依りて
二十三名及取負全額
は夕ウスク等が港口に
而當人等より配取を
五月十日に帰途
仕度者御高慮を

五月十日壬午歸西

仕矣奈神高慮を

安んぜられ夜矣

尚残分小對しては既小

肥肥致し悉矣事

ふれば不日歸西の事

運と格量仕矣

暗呼如斯仕矣安泰

よと事帰玉もる事

得られしは遍小御賢

明音閣下の深甚

而仁慈賜武佩

得られしは通し御賢

明音閣下の深甚

仰仁慈の賜と武佩

雅を賞茲ふ全欠

を代表し感謝の致

意を表し及如斯

日在

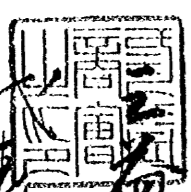
聖惟謹言

大正九年八月廿七日

函彼区仲濱少志各地

三益高會

代表者 保坂慶藏



意を奉一及如斯

日在案

正惟謹言

大正九年八月廿七日

函彼区仲濱少土蕃地

三益商會

代表者保坂慶藏



海軍大臣

加藤友三郎閣下

三益商會所有車船丸運送ハ

千早ニ救助ヒトニ対シ

厚意ヲ謝意ス

大正九年七月十九日

舞鶴鎮守府參謀長田口久盛

海軍次官枋内重次郎



軍艦齊島筑前丸救助の関元平
寄港際筑前丸救助の関元平
別紙ノ用齊島艦長ヨリ報
告有之候条御参考也

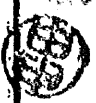
軍務局長

1773

右申
報
別紙
ス
松
添

松

1774



大正九年七月十七日於敦賀

鹿島艦長 小山 武

舞鶴鎮守府司令長官 黒井悌次郎殿

筑前丸救助の件

大正九年七月十五日午後三時本艦敦賀入港、際「ルマニヤ」皇太子殿下隨員「ガバネスク」少將、乗船タル筑前丸ハ浦塩ニ向ケ敦賀出港、為汽艇ニ曳航セラレテ將ニ鐵道棧橋ヲ離レントスルヲ見タリ、然ルニ同船ハ突然出港ヲ中止シ内港ニ投錨セリ、後恰モ本艦ヲ訪問スルタメ憲兵分隊長「赤根」少將以テ筑前丸ノ狀況ヲ質問セルニ筑前丸ハ推進機「スチールワイヤ」ヲ捲纏セルタメ一時出港ヲ

見合セタリト云フ 仍テ直ニ分隊長心得海軍中尉若尾悒
次郎ヲ派遣シ相當ノ援助ヲ與フヘキ旨ヲ通達セシメタリ
同官ノ報告ニ依ル「ワイヤ」捲纏ノ状況左ノ如シ
筑前丸ハ鐵道院棧橋ニ「入り船」ニ横付シアリタルヲ以テ出
港ニ際シ船尾ヨリ「スチールワイヤ」ヲ取り汽艇ヲ以テ曳航
棧橋ヲ離レ突堤外端附近ニ達セントスル頃船長ハ自力
ヲ以テ回頭セントシ機械ヲ回轉後退セリ然ルニ船ノ後退
方向ト曳船ノ曳航方向ト一致セサリシモノ曳船ニ無理
ヲ及ホシ傾斜轉覆セントセルヲ以テ曳船ハ急遽曳索ヲ
放棄セシカ船尾ノ状況ヲ審ニセサリシ船長ハ依然機械
ノ回轉ヲ繼續セルヲ以テ遂ニ曳索ハ推進羽翼ニ捲纏シ
出港ヲ見合スノ已ムヲ得サルニ至レリ
其後素潜リヲ以テ曳索ハ推進羽翼ヨリ離脱スル事ヲ

得タルモ「スターンチユーブ」ノ「リグナムバイター」ヲ維持スル抑
 環ノ螺釘ヲ切損セルヲ發見セリ船長ハ若尾中尉ニ右
 ノ狀況ヲ語り到底同日出港不可能ニ付専門職工ヲ
 呼ヒ寄スヘキヲ以テ別ニ援助ヲ要セサル旨ヲ告ケタリ
 依テ若尾中尉ハ必要ニ應シ助カヲ與フヘキ上ヨリ告ケ
 帰艦セリ、其ノ後在敦賀陸軍運輸部本館陸軍部運輸部通信室
 長ノ談話ニ依テ神戸ヨリ電話ヲ以テ職工ヲ呼ヒ寄ス
 ル事ニ取り計ヒタリト云フ
軍務本部員
 翌十六日午前十一時陸軍通信部長並筑前丸船長
 未艦シ神戸ヨリ未港スヘキ職工夜ニ到ラサレハ到着セズ切損
 セル「ホルト」ハ當地鐵工所ニ於テ製造シ得ヘキニ潜水夫ハ
 當地ニ在ラサルヲ以テ本艦ノ援助ヲ乞ヒタリ依テ直ニ作業隊
 ヲ編制シ事國際上ノ儀禮ニ関スル事少カラサルヲ以テ作業

隊ハ全カ修理ニ從事スヘキ旨ヲ訓諭シ派遣セリ

船匠兵曹長自ラ破損状況ヲ調査セルノ結果作業隊員

ニテ完全修理シ得ヘキ見込立チタルヲ以テ直ニ作業ニ著手

セリ時正ニ十六日正午ナリ破損及ヒ作業ノ状況別紙如シ

修理作業ハ作業隊ノ奮勵ニ依リ著々進捗シ午後十時

ニ到リ完全ニ成就セリ是レヨリ先「ルーマニヤ」ガバネスク少将浦

塩往復ノ旅行日程ニ大ナル違算ヲ生セントスル状況ナリシヲ

以テ當地運輸^{事務}部長並船長ノ憂慮一方ナラス修

理完成セル際ニハ衷心ヨリ感謝ノ意ヲ表シタリ

ルーマニヤガバネスク少将モ本艦ノ援助ニ對シ大ニ感謝

シシ特ニ隨行ノ大使館附武官ヲ本艦ニ派遣シ謝意ヲ

表シタリ

神戸ヨリノ職工ハ十六日午後九時神戸ヲ出發セントセシモ本艦

海軍

作業隊ニテ完全ニ修理シ得ヘキ見込立チタルヲ以テ其旨
ヲ神戸ニ打電シ出發ヲ取止メタルヲ以テ遂ニ該工事ニ参
興スルニ到ラス筑前丸八十七日午前十時半無事出港
セリ其ノ後本艦ヨリ無線電信ヲ以テ異状有無ヲ質
シタルニ異状ナク無事航海中ナル旨ノ回答ヲ得タリ
右報告ス

(別紙添付)

終

陸軍運輸部本部
臨時敦賀派出所長

陸軍歩兵少佐 宮崎準一

西村稿

1779

筑前凡慮為作業室施設報告

一 撞傷箇所

別番如ク推進軸管ハリガヒテレヲ維持スル抑環當
植込螺釘ハ本切撞ニ由リ本ハ螺釘頭部抑環面ヨリ
切斷大側A Bノ二本推進軸管面植込部ヨリ切斷ス

二 作業法

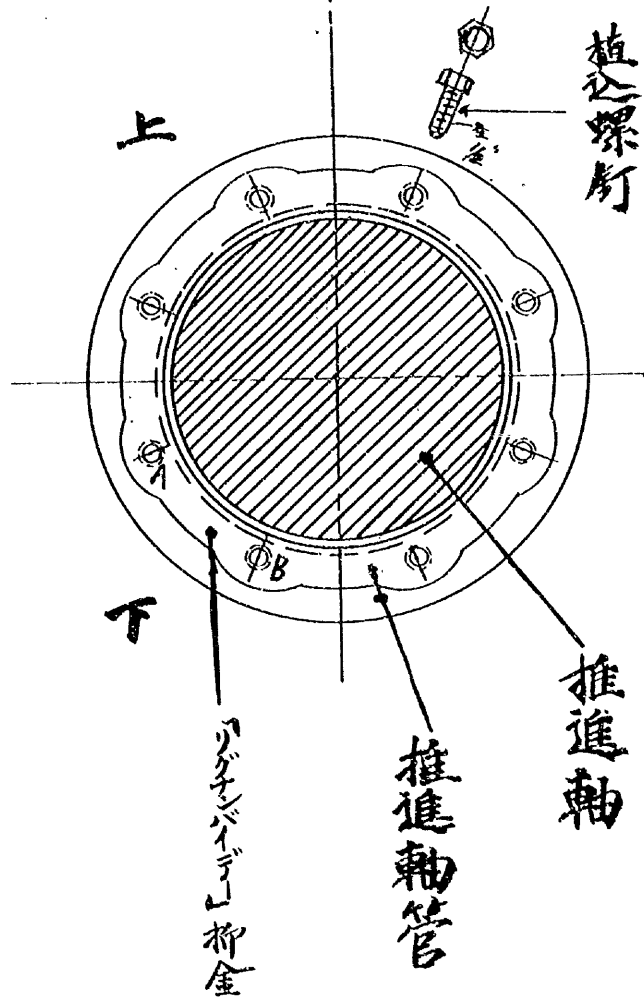
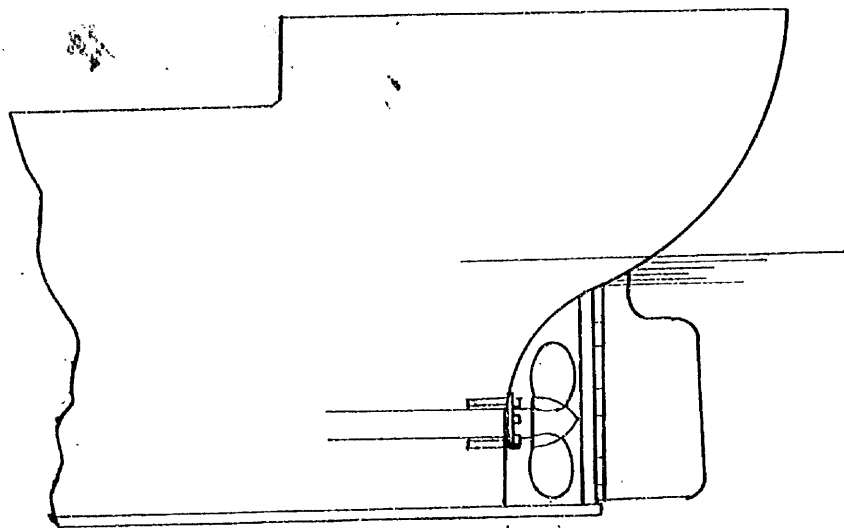
推進翼取付部ニ該抑環トノ間隔物三吋半ニシテ作
業最モ困難ナルヲ以テ船員及鐵工場職ニ依リ推進軸
接手ヲ離間外部ニ物ニ吋半引出シ六吋間隔トセリ作
業員ハ潜水器ヲ使用シ三人潜水ニテ始メ作業ニ便ス

1780

足場ヲ作り其ヨリ抑環ニ位置ノ要ヲ様ニシタガホレテ
 コーシテ外方ニ取針ニ富螺釘者本ハ自在螺廻テ
 逆轉是ヲ按取りA B 二本ハ中心ニコレターホレテハ
 ホレヨリ使用シタリ穿テ後螺切リ使用シテ螺ヲ架キ
 終テ抑環ヲ元ノ位置ニ復シ新規製作ノ螺釘架
 此以テ全部平均修付修理全ク完ス

1781

(3)



1782

海軍省

海 八号 軍 大正九年八月拾一日發布濟

軍務局長

大正九年八月十二日

省 副官

河部喜三郎氏

遭難船能島丸船員救助件

豫て能島丸消息之関に取調方を頼有之候處同船に付左

記し向午早解長より報出有之候

右浦 詳入

記

大正九年七月十六日夕ウスク、軍三十運十がエト河に於て遭難船能

島丸船長外船員十七名ヲ救助本船に收容し即日夕ウスノ

女川甚五郎漢場ニ復送合人ニ托し内地帰還方取計ヒタリ

官房第二九九號

海軍 廣達全第十五行録紙

能島丸ハ大正九年七月廿一日ガエト灣入口ノ千五岩ニ觸シ灣奥

海岸ニ坐洲セルモノニテ右部龍骨ヲ破損シ漏水アリ大修理ヲカ

（サレハ使用ニ堪ヘサルモノト認ム）

船主愛媛縣越智郡波止浜町八木亀ニ好備船主丞儀區会

所町ヲ言ハシ商會

3

（紙心象抄）

六九

大正九年七月十七日

七月十八日進達

千早艦長 廣澤恒

海軍大臣加藤友三郎殿

遭難船員救助ノ件

大海令第一二六號ニ據リオホツク行動中左記ノ通
遭難船員ヲ救助致候

右報告ス

左記

大正九年七月十六日夕ウスクノ東三十理ナガエト湾
ニ於テ遭難船能島丸船長大倉豊吉外船員十
六名ヲ救助本艦ニ収容シ即日夕ウスク五川甚五

郎漁場ニ護送今人ニ托シ内地歸還方取計ヒタリ
能島丸ハ大正九年七月六日ナガエト湾入口ノ干出
岩ニ觸レ湾奥海岸ニ坐洲セルモノニシテ右部龍骨
ヲ破損シ漏水アリ大修理ヲ加ヘサレハ使用ニ堪ヘサル
モノト認メラル
松主愛媛縣越智郡波止浜町八木亀三郎備船
主函館區會所町デニビー商會

(終)

國事週知

海軍

大正九年七月廿七日午辰三時受

函 艦 本館 高司令

第一課 第二課

海軍省

電 証

軍務

十九日付米者公表之依ハ千早艦カオコソク

海ニテ者高司令備形 野島丸ヲ救助セシムル

趣 乗位及並ニ乗客一救助方法ニ若ク飛ル

港 靴ノ場所ト檢査危急ニ關ベリ上内通チカセテ

(3)

(杉田厚納)

軍務局 受

7.28 1787

大正 七年 七月 廿三日

東京市日本橋區元大工町一番地

阿部商店



電話本局 四三九一
四七五三
電略(ア)又ハ(ア)

七百廿番

海軍省副長殿

お礼

補助糧食の帳簿を御覧いただき誠にありがとうございます。

軍務局

支那の七年七月函復に引いて「高倉」へ係給せしこと承知し海

軍務局の支那軍糧千石の抄取を乞はれられ、格別承知し御礼

を申し上げます。抄取のしるしを、御覧いただき、格別承知し御礼

申し上げます。御覧いただき、格別承知し御礼申し上げます。

御覧いただき、格別承知し御礼申し上げます。

御覧いただき、格別承知し御礼申し上げます。

御覧いただき、格別承知し御礼申し上げます。

御覧いただき、格別承知し御礼申し上げます。

御覧いただき、格別承知し御礼申し上げます。

支店 神戸市栄町通三丁目十九番地

電話本局 四三九一
四七五三
電略(ア)又ハ(ア)

1788

大正九年八月三日

馬公要港部司令官中川繁五

海軍大臣加藤友三郎殿

泰山丸救助関係書類

去七月二十一日午後五時半別紙ノ如キ無線電信ヲ
 傍受シタルヲ以テ港外作業ヲ終リ歸還シタル秋津洲
 ニ救難ヲ命シタリ同艦ハ石炭搭載出動準備ヲ整へ
 遭難地到着時刻ヲ豫想シ翌廿二日正午出港救難
 作業ニ従事シタルト別紙同艦長提出作業報告
 通リナカキ基隆ニ向ヒタル泰山丸ハ再ビ二十四日ノ暴
 風ニ遭ヒ其ノ儘進行危ルキヲ認メ針路ヲ反轉
 シテ澎湖港ニ避泊スルニ決シ二十四日午後無事當

港ニ入泊セリ、其後同船々長ノ依頼ニヨリ潜水夫ヲ
シテ毀損箇所ヲ調査セシメタル結果四枚ノ推進
翼中相隣レルニ一枚ハ其ノ根本ヨリ折斷セルヲ発見セ
リ而シテ之カ爲航行中船体ニ異常ノ振動ヲ起シ
延テ推進軸管著シク後方ニ脱出ス今後ノ單獨航
行ハ頗ル危険ナルコトヲ知り得タルヲ以テ同船々長ハ
電報ヲ以テ本社ニ照會セルニ本社ハ七月三十日同會
社、汽船五いり丸ヲ曳航ノ爲當港ニ派遣セシメ同船
ハ翌八月一日午後泰山丸ヲ曳航シ基隆ニ向ケ出港
セリ泰山丸ハ基隆ニ於テ應急修理ノ上神戸ニ返
港ノ豫定ナリト云フ

右報告ス

別紙傍受無線電信及秋津洲艦長報告添

終

1790

5ⁿ 13^m P.M. 21

SOS Want assistance immediately my
propelor broken down lat 21-0-0 N
long 120-40-0 E about 44' south of south
point of Formosa.

泰山丸救難報告

大正九年七月二十一日馬要機密第一三七號訓令
ニ基キ全二十一日急遽炭水補充ヲ行ヒ今日午後
一時十分出港原節十節ニテ泰山丸遭難位置ニ向
フ今日夜半ヨリ天候次第ニ險惡トナリ二十三日未明
ヨリ風力ノ増加ト共ニ猛烈ナル濛雨ヲ齎シ咫尺ヲ辨
セズ加フルニ偏西ノ長濤其ノ度ヲ加ヘ艦ノ動搖三十五
度附近ニ及ビ遭難船ノ發見竝ニ救助ハ到底不可
能ナルモノト認メ二十三日午前十時四十五分台湾南西
岸ナル海口ニ投錨シ幾分天候ノ恢復ヲ待テ尙泰山
丸ノ動靜ニ注意ヲ急ラザリキ全十一時四十五分泰山
丸ヨリ無線電信ニ接シ全船ハ速力約五節ノ自力ニ
テ全港南方ヲ徐行シツアルヲ知り遠カラズ全港沖

合ニ差ニ懸ルモノト認メ後泊ヲ繼續シ居レリ午後一時全
 船ハ打狗入港ノ目的ヲ以テ北上ヲ續行シ居ル無電ニ
 接シ全三時出港枋藁附近ニ碇泊シ全船ヲ警戒セン
 ト北上シ全五時三十分全地ニ投錨シタルモ錨地不良ナリシ
 ニ付キ投錨打狗小琉球島附近ヲ徐行警戒セリ然ルニ
 全十時三十分全船ハ打狗入港ヲ取り止メ基隆ニ直航ス
 トニ変更セル旨ノ無電ニ接シタルヲ以テ全船ト接觸ヲ保ケ
 ツ、其ノ動靜ニ注意シツ、北上シ二十四日午前七時三十分全船
 ノ状態ヲ確メタルニ自カ基隆ニ回航シ得ル見込立ケタルト天
 候ニ次第ニ恢復ノ徴ヲ呈シタルヲ以テ全船ト別レ馬公ニ向ケ
 変針シ全午後一時三十分馬公ニ碇投セリ

終